

**潮騒通信**

潮騒ジョブトレーニングセンター

Drugs and Alcohol Addiction Rehabilitation Center

一部 100円

# どっかい生きてます!



春の筑波山ハイキング記念写真

報告は来月号で...

2014

3

## 潮騒 JTC は 「ほどほどでやれる農業」を 目指します

2、3月は潮騒農業の本格スタートに向けた準備期間です。この時期は主に農場の修復手入れや土作りに、我が農業自然隊メンバーが日々励んでいます。潮騒農業の発展に向けて助成最終年の今年を実り多いものとするために、既報したようにいち早く一部機械化に踏み切りました。平行して農業隊のシェアハウスの整備にも力を入れています。今後は農作物の安定的な収穫と商品化レベルの維持、直売活動やJAとの連携など販売ノウハウの向上を模索します。これまでの潮騒ファイザープロジェクトによって、依存症の回復には自然と向き合う農業への取り組みが有効な手段であり、就労に向けた一つの形になるとの手ごたえを得ています。自然のおおらかさに抱かれることで暮らしが支えられ、心身や生き方に偉大な恵みを授かり、回復も手にできるという確信です。注意しなければならない点もあります。私たちの都合で「自然」を便利に使い分けることの罪深さには自戒が必要だということです。例えば、現代農業の主流である機械化に頼り切ってしまうと、今度は逆に依存症の回復には阻害要因になりかねません。あまり実績や効率性に縛られず、欲張らずに「ほどほど」でできる農業をバランスよく営むことが重要です。

昔、私が子供の頃の農業は今で言う「3K」の人力に頼る肉体労働の職業で、農家は一年中忙しく家族総出で働きづめでした。食糧増産が求められ、半人前でも子供は貴重な労働力でした。私も大人に交じって鍬や万能で田畑を耕したものです。なかでも夏場の田んぼの草取りは大変でした。深い泥田に足をとられながら腰をかがめての辛い作業で、腰の曲がった農家のお年寄りが多かったのもうなづけます。苦勞の割に農家の収入は少なく、単純作業だけに子供には1日がとても長く感じられたものです。ですから、私は貧しい農村から逃げ出し、賑やかで華やかに見えた街場での生活に早くからあこがれました。

その流れから私は反自然の生き方へと向かい、ついにはアルコールと覚醒剤に支配された反社会の人生に転落して身を持ち崩した訳ですが、今は一転して宇宙や神の世界にも通じる自然の偉大な恩恵に浴して、依存症の回復の道を歩んでいます。そのことを考えると、原点回帰ではありませんが、自然との折り合いの付け方こそが依存症回復のキーポイントであるとの自覚に至りました。ですからトラクターなど機械化は自然に対する適度な距離感を失わなければ、潮騒農業には大きな味方となります。同じように私たちも依存対象とのバランスの取り方を農業から学べるという二重の効果をもたらしてくれるのです。今回は多少思弁的な随想になりましたが、潮騒 JTC は一部機械化に頼りながらも「ほどほどでやれる農業」を目指します。  
(センター長 栗原 豊)

## 念願だった日本財団の福祉車両が納車

「いつかは自分たちも…」の思いが実現



▲ 新たなシンボルデザインが特徴の日本財団の福祉車両(右はキクさん、左はマコトさん)

潮騒 JTC はこのほど、日本財団(笹川陽平会長)の平成 25 年度福祉車両助成事業により、念願だった専用の送迎車(ホンダ・ステップワゴン8人乗り)の納車を受けました。既に日本ダルクや横浜ダルクでは助成実績がありますが、全国のダルク関連施設では珍しいようです。

この事業は、同財団が全国の福祉関係施設などを対象に毎年ヘルパー車や車いす対応車、送迎車等の整備を実施しているものです。各種補助金が減少傾向にある厳しい環境にあつて、潮騒のような公的補助のない自主運営の小規模施設にとっては大きな福音であり、応募ニーズも高いのが実情です。

それだけに潮騒関係者らは、街中で白地の車体側面に両手をかざした笑顔がシンボルマークの入った財団の福祉車両を目にするたびに、「いつかは自分たちも…」と申請にチャレンジしてきました。そして今回、事業認定を受けたことで新しい色鮮やかなシェアマークが目印の福祉車両の納車が実現しました。

依存症は薬物依存のように非行や犯罪と絡むケースや、アルコールやギャンブル依存のように家庭崩壊などのイメージが先行して地域の誤解と偏見が根付く、治療やケア体制が遅れています。独立した障害として扱われるべきですが、長く制度のはざまに医療や福祉の蚊帳の外に置かれてきました。

加えて最近では依存対象の多様化により重複障害と精神疾患や内臓疾病を併発した人が増え、潮騒でも入寮者のほとんどが病院通いで、この流れが常態化しています。高齢依存症者の認知症も深刻化しており、病院で処方される精神薬などで新たに処方薬依存が生まれ、医療機関との連携の仕方が問われています。

一方で、依存症は専門病院での適切な治療や自助グループ活動を通して回復が可能な病気として、少しずつ社会的な認知が進みつつあります。そのため潮騒でも行政の福祉相談窓口や矯正機関、アルコール専門の精神科病院など多様なルートで入寮者が増えているのが現状です。

納入された新しい福祉車両は、毎日取り組んでいる回復プログラムの実践を下支えするために、こうした病院への通院や夜間の自助グループ参加など移動用車両として、入寮者の「足」となって活躍します。鹿嶋市内や近隣地域でこの車両を見かけたら、どうか注目してください。

この事業を担当したスタッフのマコトさんは「斬新で目立つシンボルマークのワゴン車を見るたびに“いつかは俺たちも…”と思ってきたので喜びも大きい。今回潮騒が事業認定され、福祉車両の恩恵を受けたことは大きな自信と励みです。みんなで大事に乗って依存症の回復に弾みをつけたい」と感謝していました。

## 「3億円の倒産を乗り越え 希望のメッセージ」

プーキーさん(横浜ダルク職員)が就労支援で体験講話



▲ プーキーさん

今年もファイザー社による市民活動の助成事業である「潮騒ファイザープロジェクト」が、農業を中心に1月から本格的に動き出しています。幸運にも潮騒 JTC は2011年度から3年連続で継続支援を受け、今年がプロジェクトの完結年です。このうち地域社会で働く先輩回復者の体験談を聞く「就労支援実践講座」が、入寮者の皆さんに好評です。

これを受けて潮騒 JTC では前年に引き続き、今年も2月から11月まで合計10回の予定で同講座を開きます。その第1回講座が2月7日、鹿嶋市宮中の潮騒デイケア施設で開かれました。今回講師を務めてくれたのは、玄人はだしのボーカリストとしてダルク仲間の人気者、横浜ダルク職員のプーキーさん(48)でした。

プーキーさんは十代半ばから約16年間、主にアルコールと覚醒剤に依存しました。ダルク通所による回復の歩みの中で、実家の会社倒産を体験するなどスリッパの危機を乗り越え、17年のクリーンタイムを築いています。これまでと同じく、プーキーさんも回復プログラムと仲間とのつながり、ミーティングの重要性を説きました。



プーキーさんは茨城県取手市生まれ。地元の難関私立進学中高一貫校の高校をたった2日通学しただけでリタイア。既に中学時代から学校で飲酒するなど横道にそれ、15歳でシンナー、18歳で覚醒剤へと移行し、その後は大麻、米国でコカインを経験するなどオールラウンドに薬物を体験。24歳からは覚醒剤一筋となり、31歳で東京ダルクにつながるまでどっぷり依存しました。既に結婚して家族を持っていましたが、東京ダルクには3カ月入寮と約1年間の通所を経て、以後は一貫して回復の道を歩んでいます。

その間、私的には実家と和解して、父親が興した水道設備と土木建築会社をしばらく手伝いました。しかし、予期しないことに父親が急死し、プーキーさんは代表取締役として会社の経営を任せられました。そこで分かったことは、

経営権を引き継いだ父親の会社が火の車状態で、いつ倒れてもおかしくないほど経営が悪化している実態でした。

年間売り上げは1億円程度なのに借金は2億円という赤字続きの会社を引き受けながら、プーキーさんは必死で2年間頑張っって借金の返済を続けました。食べたものをもどすほど辛い生活の中、ついに8年前に力尽きて裁判所に自己破産を申請。持ち家も財産もすべて失い、負債総額は3億円にのぼりました。好きな音楽をと、29歳から経営していた音楽スタジオも手放しました。



精神的にも肉体的にもお手上げ状態となったプーキーさんを自死の誘惑が襲います。その日、渋谷でバイク便のアルバイトの最中、「仕事も家族も何もかもうまくいかない。もう限界だ。死ぬしかない…」そう思った時、不思議なことに近くで自助グループミーティングがあることを思い出します。「しんどいけど薬物だけは使わないぞ」。その決意を支えたのは曲がりなりにもつながっていたダルクの仲間との絆であり、自助グループのミーティングでした。

この時のミーティング参加でプーキーさんは命を救われました。偶然、自分をよく知る仲間がおり、温かい助言をくれました。そうして直面している困難な問題を冷静に整理できたのです。「助かった。このプログラム(12ステップ)はすごいんだ。これって自分が生きる指針にもつながる」と悟ったそうです。その後、定期的にミーティングに通うきっかけになりました。

その直後、日本ダルクの近藤恒夫さんから横浜ダルクの運営を手伝うように依頼され、以後4年8カ月、職員として働いています。プーキーさんは「家庭を持ったままダルクにつながって回復したケースは珍しいと思う。なんとかプログラムにつながっていれば、社会でもバランスを取りながら仕事はできる。力まずに今日やるべきことをやること。そうすればチャンスは向こう側からやってくる。どんな困難も乗り越えられる」と希望のメッセージをしてくれました。

## 「自力で建設会社を設立し 山谷のアル中仲間を応援」

アルコール依存症の遠藤さんが講師に



▲ 遠藤菊蔵さん

就労支援実践講座の2回目はアルコール依存症を克服した事業家の話。講師はクリーン暦28年の遠藤菊蔵さんでした。遠藤さんは草創期の「みのわマック」につながり、マック生みの親であるミニー神父らと交わって回復の道を歩んだ人です。遠藤さんは建設会社を興して成功を取めると、かつて自分が活動していた山谷地区でアルコール依存症に苦しむ仲間たちに自力で支援の手を差し延べました。講演は潮騒JTCのデイケア施設で約1時間行われ、入寮者からも熱心に質問がありました。



山谷地区は東京都台東区と荒川区にまたがる寄せ場(日雇い労働者の居場所)で、ドヤ街として有名です。岩手県出身の遠藤さんは20代、ここで手配師をしていました。当時は高度成長期、建設労働者は引く手あまたで、とび職が覚醒剤を打って現場に向かう時代でした。遠藤さんも覚醒剤に手を出しましたが、「俺はあまりシャブは追っかけなかった。打ちながら飲みに行くんだけど効かない。周りから“馬鹿じゃねえのか。こんないいもん食ってるのに、なんで酒飲みに行くんだ”とからかわれた」そうです。その分、酒に溺れ重度のアルコール依存症者になり、何度か死の淵に立ちました。刑務所務めも経験し、38歳で山谷の自助グループにつながりました。

遠藤さんを底つきさせたのは「刑務所はもうこりこり。寄せ場から出たい」という熱い思いでした。ヤクザ時代の見栄とはったりもありましたが、紙袋一つで「みのわマック」につながり、ミニー神父らの応援で依存症を克服します。ミーティングにも出て仕事にも励み、ビル掃除から始まり、ついには建設会社を設立します。一方で初発の志を失わず、山谷の仲間たちの救援にも努力しました。

「山谷は厳しかった。だから俺は生き残った。奮起して3、4年で会社を立ち上げ、ビル買ってね。後にダルクで職員やってる仲間や自分で会社立ち上げて7、8人が独立したかな。我が事のようにうれしいよ。薬やめ続けられれば、アルコールを止め続けられれば、そうやっていくんだよ。

きちんと仕事もできるようになっていくんだ。会社立ち上げたから偉いんじゃない。俺の生き方がメッセージとして残っていくんだよ」

エピソードも数多い。会社を立ち上げて数年後に中古の車で山谷に行ったら、かつて一緒にのんだくれていた連中から「えんちゃん、どっからその車盗んだんだ」と言われたことは忘れられない」と言います。「山谷にいると時間がたっているのが分からないんだ。歳月人を待たず、だよ。時間は過ぎていくのに、みんな取り残されたままなんだ」。その頃、山谷ではアルコール依存症者が路上で死んでいても単なる風景にすぎなかったようです。今と違って行政の目配りも弱く、遺体は犬猫のように扱われ、見かねた遠藤さんは自分の金で何人もの無縁仏を弔ったり、冬の寒空の下で野宿する多くの仲間たちを簡易宿泊所に泊ませたりもしました。

「俺は自分で稼いだ金を使って、それを7年間続けた。“えんちゃんはばかだよ。行政でもないのに…”って言われたけど、いい格好をしたいんじゃない。俺は一度死んでた人間なんだ。路上で救急車に運ばれて九死に一生を得たこともある。野垂れ死にした仲間の姿は俺なんだ。あいつとはちがう、とはとても言えない」。その遠藤さんが20数年前、アメリカに行った際には、「あのアル中の遠藤がアメリカに行ったんだってよ。じゃあ俺も酒やめよう、マックに行ってみよう、と一時期たくさんの仲間が集まった」と過去の体験を披露してくれました。



回復した遠藤さんは今では家族とも和解し、孫の結婚式にも呼ばれているそうです。講演のむすびには「使わない、飲まない姿を両親に見せてやって、安心させてほしい。それから仲間の手助け。依存症者はアル中もヤク中も同じ。やらなきゃ、飲まなきゃ勝利者なんだ。使うか、飲むか、生きたいのか死にたいのか、それしかない。どうか皆さん、自然体で回復に努めてほしい」と入寮者にエールを送り、温かい拍手が送られました。

女性メンバー

# 「真壁のひなまつり&益子焼」 日帰りツアー

～ 今年も陶芸の魅力にも触れました ～



女性の祭りといえば雛祭り。2月27日に茨城県西部のまち桜川市真壁地区の「真壁のひなまつり」を女性メンバーが見学しました。あいにく雨模様の天気でしたが、土蔵や格式ある門が残る古い家並みの通りを散策しながら、商家の入り口に飾られた江戸・明治・大正・昭和・平成の雛人形を楽しく見ることができました。

このまちでは12年前から、おもてなしを掲げて2月の約1カ月に雛祭りを開催。各家々に伝わる雛人形が大事に保管され、時代を超えて受け継がれています。雛人形はその時代によって顔つきが異なります。珍しい江戸・天保年間に作られた雛人形は気品を感じさせる公家顔が歴史ある風情を醸し出していました。

昼は地元で有名なハンバーグ専門店に行きました。かつてテレビ番組の、寂れていた店を復活させる企画で成功を収め、優等生とされているお店です。予約をしないと入れないほどの人気店で、去年は満員で入れませんでしたので、今年は予約をしてゆつくりと食事を楽しみました。

午後からは車を30分ほど走らせ、栃木県にも足を延ばし陶芸のまち益子町に向かいました。益子陶芸美術館で第一級の陶芸作品を鑑賞したり、移築された人間国宝の陶芸家、故・浜田庄司(益子焼を代表する陶芸家!)の藁屋根の家や登り窯も見学しました。共販センターや近くのお店にも入ったり、地元で有名な陶芸工房にも立ち寄ることができ、充実した1日でした。(み)



**レイコ** まだ春浅い2月27日、真壁のひな祭りや陶芸のまち益子を見学してきました。去年も参加しましたが、江戸、明治、大正、昭和、平成と各時代を彩った伝統的なおひな様を鑑賞できました。それぞれ表情が違って、時代をうかがう事ができました。午後から訪れた益子焼も、大きな物から小さな物までデザインも様々で素晴らしかったです。いつか私も益子で、優雅に一人ゆつくりとお茶を楽しみたいと強く思いました。

**ミヤ** 雨の中、色々なお雛様を見てきました。初めてだったのでお雛様の数の多さにも大変驚き、日本の良き伝統が受け継がれている事にも感動しました。一体一体の表情が違って、今の時代の顔は現代風に見えました。代々受け継がれ守ってきた雛人形を、家の人がとても大切にしている事がよく分かりました。写真に収めさせて頂きましたが、いつまでも変わらずに受け継いでほしいなあと思いました。

次に県境を越えて益子焼を見学に行きました。色とりどりの焼き物がたくさん並んでいて、とてもきれいでした。お店を何軒か回ってみました。店ごとに違う色を出していました。製陶の工房見学にも行きました。すっかり益子焼に魅せられ、私も陶芸をやりたいと思いました。

**しま** その日はあいにくの雨だったのですが、去年も同じ真壁のお雛様を見学していたので、少し余裕を持って風情のある町並みを歩くことができました。店先でお雛様を覗かせていただきながら、いろいろと説明を聞くことができました。そうした謂れに触れないとただのありふれた雛人形になってしまうけれど、家々に受け継がれる歴史があることを知り、感動もひとしおでした。



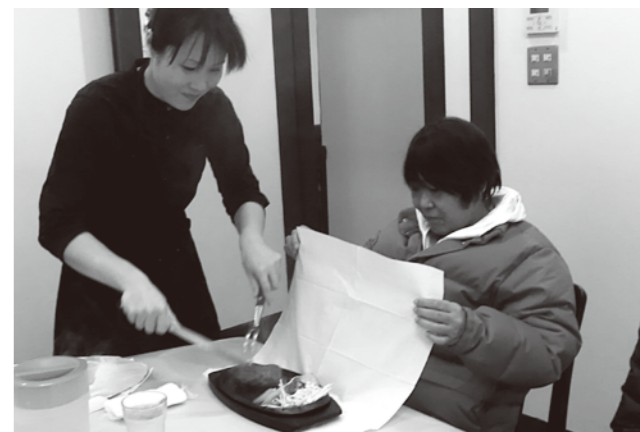
その後は益子焼を観に行きました。何店かの店を巡り歩き、店内に並んだ陶器の一点一点が単なる商品というよりも、歴史を背負った陶芸作品であることに思いをはせました。それぞれ製作者(作家?)によって何度も手を加えられ、登り窯で焼かれるまでの労苦を思い、観せていただきました。

**イルカ** 真壁のひな祭りに行こうという事でひな人形を見学に行きました。江戸から現在までと、その時代によって人形の顔の形や表情が異なり、歴史を感じました。

それと茅葺屋根の家も見学に行きました。たかが雛人形と言え、時代の移り変わりが感じられて、意外に歴史ものが好きな私には、とてもよかったと思います。

後半では益子焼の陶芸美術館にも行き、美術工芸品としての陶芸の素晴らしさを堪能しました。何軒かの陶器店にも入り、値段の高さにもびっくり。それでも何か一つ記念にと気に入った陶器を買い求めました。大事な思い出として大切に使用していきたいと思っています。

とても楽しい一日でした。また来年も行けるとい事なので、早くも楽しみにしています。



# 今月のイベント参加報告

こんなイベントに  
参加しました、  
というご報告。

## とちかちダルク1周年記念フォーラムに参加

特定非営利活動法人「とちかちダルク」（宿輪龍英理事長）の法人設立1周年記念フォーラムが2月22日、北海道帯広市のとちかちプラザであり、潮騒 JTC からは栗原豊センター長が参加してダルクの仲間たちや会場の皆さんと交流を深めました。

ゲストスピーカーは東京ダルクの幸田実施長、木津川ダルクの加藤武士施設長、ダルク創設者の近藤恒夫日本ダルク代表でした。近藤さんは、国内にモデルがなく困難だった草々期の苦労や当事者活動の原点について語り、集まった各地のダルク関係者にヒントを与えてくれました。

ほかにも当事者の体験談やスライド上映がありました。とちかちダルクは平成24年11月にNPO法人化の認証を得ました。現在、宿泊し共同生活できるグループ

NPO 法人とちかちダルクの法人設立1周年記念フォーラムで講演する近藤恒夫さん



ホームと、日中活動(デイケア)を通して自立訓練(生活訓練)も行っています。

栗原センター長は「帯広は北海道でも遠方なので毎年のフォーラムに参加するのも一苦労。でも、考えてみれば潮騒 JTC も交通面では関東の“陸の孤島”だけに、気持ちが通じ合う。いろいろと収穫のあったフォーラムでした」と語りました。(勝)

## 平成 25 年度依存症回復施設職員研修を受講して

「平成25年度依存症回復施設職員研修事業」が2月26～28日までの3日間、横浜市内で開かれ、潮騒 JTC を代表して同研修を受けさせて頂きました。延べ20時間に及ぶ濃密な研修内容で、私には不得手な忍耐と理解力が求められましたが、飽きさせない講座ばかりでよい頭の体操になりました(笑)。

精神科医を中心とする講師陣の皆さん方は、いずれ劣らぬ国内第1級の依存症に詳しい専門家の先生ばかり。家族会や自助グループ関係者の話やグループワーク、フリーディスカッションなど盛りだくさんのプログラムメニューでした。全日程を終えて、私も終了証を頂くことができました。現場で役立つ、とても有難い研修でした。

講師の先生方の講義は大変分かりやすく、また詳しく説明していただき助かりました。動機づけ面接法など初めて聞く面接法や、精神疾患の詳しいお話、ハームリダクション、グループに分かれての事例検討など、とても内容の濃い時間を過ごせました。今後、依存症という言葉から「～使用障害」という言葉に変わるという話はビックリしました。

これらの講話を聞き、ノートにメモを取っただけですが、知らない事だらけで少し空っぽな頭に知識が入った気がします。動機づけ面接法の中で、「出迎える精神で」という言葉がとても印象に残っています。毎日の忙しさから、新しく来る仲間への対応がマニュアル化している事に気づかされました。反省です。

自分が初めて施設に繋がった時の気持ちを思い出せば、言うまでもありません。今後機会があったら、もっと動機づけ面接法について勉強したいなと思いました。今後研修会で教えてもらった事を肥やしにして、仲間のコーディネートに役立てていきたいと思います。3日間の研修本当にありがとうございました。(マコト)

### 【依存症回復施設職員研修事業】

依存症リハビリ施設職員に医学的知識や利用者への対応方法、利用可能な社会資源に関する知識の向上等を図るとともに、依存症者を持つ家族に必要なスキル等を提供する研修。厚生労働省からの委託を受けて、独立行政法人・国立病院機構久里浜医療センターが実施。修了者には厚生労働省名で終了証が発行された。

## 岐阜ダルク女性ハウス1周年記念フォーラムに参加して

岐阜ダルク女性ハウス設立1周年記念フォーラムが3月1日、岐阜市内で開かれ、潮騒 JTC からは栗原センター長と私が参加しました。岐阜ダルクと潮騒 JTC の交流は特に無かったのですが、以前から男性の施設の施設長が女性だと聞いていて、私は遠山香さんの存在が気になっていました。私は男性の仲間の中で大変なことばかりを経験してきましたので、女性には男性施設の施設長は難しいと考えてきました。なので女性ハウスと一緒になんて私には無理と思っています。でも、香さんはやっているんですね！羨ましい。

フォーラムではゲストのカリスマ牧師、アーサー・ホーランドさんの愛のメッセージに感銘を受けました。素直で時にはシャイなアーサーさんですが、63才の牧師には見えませんでした。潮騒のセンター長(施設長)は71才ですが、負けずに頑張っています(笑)。アーサーさんと外山憲治さん(名古屋ダルク代表)のトークショーも良かったです。共に革ジャンにジーンズとブーツがよくお似合いで、まじめな話し方のケンさんとお話し上手なアーサー牧師が大変な時代を過ごし、年を重ねて60代のこれからもメッセージを運ぼうという姿勢には頭が下がりました。

続く勇陽子さん(女性ハウス責任者)は「いまだ難しい漢字の読み書きに苦しんでいる私だけど、いろんな事を乗り越えこれから仲間と共に回復していきます」と決意を述べていました。涙を浮かべ、言葉にならなくなった彼女に私は思わず、「頑張れ!」と声を掛けてしまいました。

## 映画プログラムに参加して

こんにちは。シャブ中の京介です。少し前、施設の映画プログラムに参加して「トリック劇場版・ラストステージ」を観ました。TVで人気だった仲間由紀恵と阿部寛のコンビが、超常現象や奇怪な事件に隠されたトリックを解決していくミステリードラマです。

今回はこのコンビが海外に出向き、祈祷師のインチキぶりを暴露する内容で、生瀬勝久や野際陽子ら個性

潮騒 JTC にも女性の仲間がいて、男性と一緒にプログラムを始めて3年になります。どのように女性施設を確立すべきか…、悩みながら試行錯誤の毎日です。生活やプログラムでの男女問題の課題に頭を抱えていますが、潮騒のセンター長は「所詮この世では男と女が一緒に生きていくのだから!」と達観?しています。

そう言われても、依存症の私達は男女の問題を抱えずにプログラムをこなす事の難しさを目の当たりにしてきているので、無意識に女性の仲間を大事に包み、抱え、コントロールしてしまいます。でも、そうすると私が潰れてしまうのです。無力を認められなくなって自分の意志をすぐ、使っちゃうのです。

そんな事を何度か繰り返しながら、「もうやめた」と手放す事を口にしたら、あら不思議! 開き直りか? ハイヤーパワーの恵みか? 女性の施設を本格的に大きく開設しちゃおうと頭が切り替わったのです。私は「ハイヤーパワーにお任せ!」「与えられるのを待つわ」と何でも祈ってばかりなので、センター長からは「お任せするだけではなく、目的に向かって努力しなくては何も与えられないんだよ」という助言をもらいました。

要は私一人で何でも頑張っちゃおうとすると、結局はうまくいかないんですね。仲間にも甘えて手伝ってもらおう! もちろんセンター長にもネ! 今、一緒に手伝ってもらっているスタッフ研修の仲間は、不器用なだけど一生懸命プログラムに取り組んでいて、勇陽子さんに似ていたものですから思わずエールを送りたくなった次第です。(栗原ルミ)

ある俳優らが脇を固めていました。仲間と阿部のコミカルな演技が掛け合い漫才みたいで面白かったです。

思い起こせば私が映画館で最後に観た映画は「鬼龍院花子の生涯」でした。ずいぶん久しぶりに映画を楽しみました。映画プログラムは毎月となったので、これから入寮する人たちは期待してもいいかなと思います。(京介)

# 啓発リーフレットを制作・発行

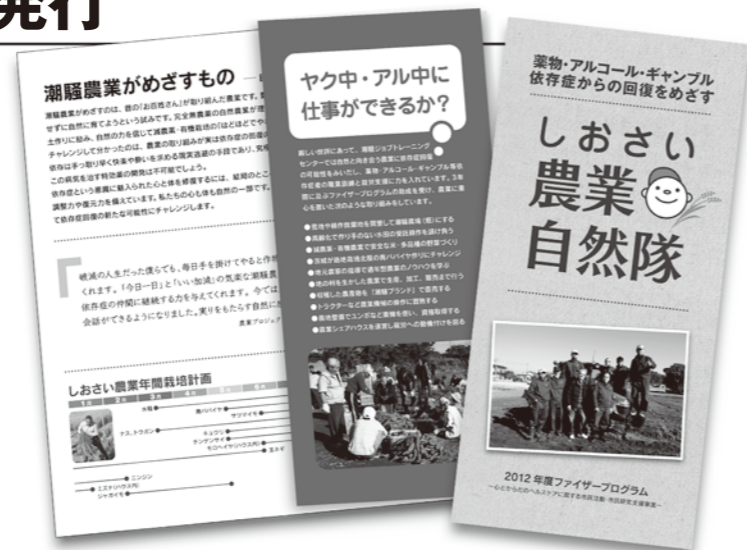
## ■潮騒農業PRのツールとして有効活用

潮騒ファイザープロジェクトの中核をなす潮騒農業の取り組みを広くPRするため、潮騒ジョブトレーニングセンターはこのほど、カラー刷りの啓発リーフレット3千部を発行し、依存症に関わる地元地域の医療福祉関係団体などに配布しました。潮騒農業PRのツールとして今後、幅広く有効活用していきます。

継続助成の支援を受けた 2012 年度ファイザープログラム事業（計画実施年は 2013 年 1～12 月）の実施項目で、まとめの作業として位置づけた作業です。しかし、折から制作作業が年末の繁忙期と重なったことから当初計画期間内に完了できず、ファイザー事務局の承認を得て今年 1 月まで延長して制作しました。

発行した啓発リーフレットは、携帯しやすい A4判三折サイズで、レイアウトに工夫しました。表紙に、導入間もないトラクターを前にした農業自然隊メンバーの集合写真を載せ、背表紙は栗原センター長が、自身の回復の歩みを踏まえた潮騒の就労支援についてメッセージ。中折れ部分には「ヤク中、アル中に仕事ができるか?」とし、潮騒農業の具体的な作業項目を列挙しました。

見開きの内側は「潮騒農業がめざすもの」として依存症者が模索する“農業のかたち”を指し示し、農業プロジェクトリーダーのヒトシさんが、自然と向き合う潮騒農業の効用に言及しています。下段には農業の年間栽培計画



を表にして米作りや多品種の野菜栽培のメニューと作付け時期を表し、右端にピーマン収穫風景の写真を配して訴求力をアップさせています。

栗原センター長は「地の利を生かした潮騒農業を広くアピールするために、みんなで知恵を出し合い議論を深めた。昨年末は例年よりも施設行事に追われたことから計画期間を延長せざるを得なかった。時間はかかったが、手間を掛けた分それなりに満足できる仕上がりになった」と手ごたえを語りました。

今後、完成した啓発リーフレットはフォーラムやイベントなどで配布するほか、潮騒農業自然隊メンバーが常時一定部数を携帯して潮騒農場はもちろん、出先で出会う人たちに向けて手渡していくことにしています。(み)

# 鹿島灘太鼓の練習が始まりました

今日は、自分にとっても、仲間達にとっても、とても思い出深い一日になりました。鹿島灘太鼓の島田先生をはじめとする仲間の方達、しかも、その内の一人の女性の方は、全国で二位の実力者。男性の方も全国で三位と、どちらの方も凄腕の持ち主の方達で、太鼓の演奏を見ている、圧倒されながらも音が自分達の体の中にまで響きわたる感じで、とても感動させられました。

自分も上手になりたい、感動を与えられる演奏を見られるようになりたい、と強く思いました。厳しい練習にも立ち向かい、最後には人に感動を、そしてヤク中アル中だった自分達にも、人を感動させられる喜びを生きているうちに味わいたい、と強く心に刻まれました。決して忘れる事のできない一日になりました。これからの自分達を見て下さい。(カイジ)



※潮騒 JTC では、昨年夏からエイサー（琉球太鼓）の練習に取り組んでいますが、今回縁あって入寮者有志が新たに地元の和太鼓グループ「鹿島灘太鼓」の指導を受けることになりました。各地で演奏要請の多い実力派の和太鼓ですが、今後は地道な練習を積み上げて 12 月の潮騒 JTC9 周年フォーラムでエイサーとのコラボができれば、と考えています。

# 受刑者からの手紙

「しおさい俳壇」とともに潮騒通信を特徴づけるのが、この「受刑者の手紙」です。外部とのコミュニケーションに渴望している皆さんの生の声はとても貴重です。手紙は全て目を通してありますが、ほんの一部しか掲載できないのが悩みです。受刑者の皆さん、めげずに頑張ってください。(ユタカ)

## 出所してもアルコールが止まるか不安

早くも2月に入り、私の出所もだんだんと近づいてきました。今は栗原さんの所で頑張っていく決意ですが、社会に出たら薬物は止めていく事は出来るとは思いますが、正直アルコールの方はスリッしてしまうのではないかと不安です。私のアルコール依存症は飲むと気分が落ち着くのですが、(アルコールによる酔いが)切れると怒りっぽくなってしまいます。(刑務所の)中に居れば飲みたくても飲めないと諦められるので大丈夫なのですが、出所するとどこでもアルコール類は販売されているので、私には少し怖気がします。

それだけに潮騒 JTC にまた帰って、同じ病気の仲間の皆さんと一緒に、スタートラインに立って1日1日を飲まない生活をしていきたいと思っています。薬物の影響だと思うのですが、この頃幻覚や幻聴に悩まされています。今回の刑を務めるまで、私はずっと大麻を、吸ったりクッキーに入れて食べたりしていた影響だと考えています。そんな私も出所すると、すぐに48歳になってしまうので心を入れ替えてやっていく決意です。(愛知県 S・S)

## 退寮後仕事に就いているのか実情を知りたい

自分は当刑務所で2回目の冬を過ごしましたが、今は出所後の自分の生活と仕事のことが一番の不安です。来年の出所時は51歳となり、残りの人生もあまり長くはないと思うのです。もちろん覚醒剤はやめて頑張っていこうとは思っていますが、やはり仕事のことが心配です。いったい潮騒ジョブの人たちは施設内でどういう生活を、施設を退寮した後はどうしているのでしょうか。本当に依存症を回復し、きちんと更生して、堅気になって就労しているのでしょうか。世知辛い世の中で本当にヤク中やアル中、ギャンブル中毒者にできる仕事はあるのでしょうか。皆さん、施設を出た後にどういう仕事をして生計を立てているのでしょうか？私も人生最後まで潮騒ジョブで送るわけにはいきませんので、その辺りの実情を知りたいのです。どうか宜しくお願いします。(東京都 A・M)

## 潮騒に戻るのが回復への一番の近道だと思う

…潮騒通信によると、東北の復興支援ツアーとか各地のイベントでの太鼓演奏とか、相変わらず施設は忙しいようですね。マコさんやナカさんも元気そうだし、ユーさんやエンさんも変わらない様子ですね。写真で見るとナカさんの顔つきから以前より回復しているなど思います。いろいろと活躍しているので自信がついたのでしょうかね、心も強くなりつつあるようで羨ましい限りです。若者はいいですね。56歳の私はキクさんと同じで、体力もいっぱいいっぱいのところがありますよね。私としては、そちらに戻るのが(回復に向けての)一番の近道だと思うので、キクさんどうか一緒に回復の道を行ってください。新しい生き方や施設での生活をまた私に、一から指導してください。(後略)

(愛知県 Y・K)

## 今度こそ薬物は断ち切らないと全てを失う

いつもの潮騒通信の差し入れ、礼を申します。年齢(よわい)54歳を迎えての現在、昔の不摂生からか扁桃痛、高血圧、喘息などで苦しんでいます。正直、負けず嫌いの私ですが、今度こそ懲役人生には終止符を打ちたいと必死です。身体のため、自分自身の人生を考えるために、改めてよく考え、反省し、本当に最後の務めとして存じます。薬物だけはもう断ち切らないと、母や弟家族、友人、知人を今度こそ失うことになるでしょう。私は当所でダルク(北海道)の方々による薬物教育のミーティングなどに参加しています。参加者のほとんどは一致して、失ったものの多さとその大きさを改めて語っています。今後さらによく考えて、潮騒 JTC 様との関わりを続けていきたいと願っております。

(北海道 K・M)

## 周囲の力を借り、ゆっくり立ち直りたい

皆様からの支えで落ち着いた受刑生活ですが、私も出所まで8カ月余り、出所してから事を自分なりに考えています。今回で受刑生活は4回目となり、出所すると46歳になります。これを最後に、もう一度人生をやり直したいと強く思いますが、決して自分1人の力では更生できるものではなく、周囲の人たちの力を借りて、ゆっくり立ち直っていきたいです。潮騒 JTC の皆様、どうか力をお貸しください。

(北海道 K・H)

※読みやすくするために一部手を入れました。ご了承ください。

# しおさい、俳壇

3月のお題 **卒業**

選者 **桐本石見**

わが俳句人生の歩み・No.5 施設長 栗原 豊

ダルクにつながった私は施設での生活にも慣れ、次第に気持ちが安定してきた。自分なりのペースをつかめるようになると、さっそく地元の神栖俳句会に入会した。これには背景があった。府中刑務所時代に、当時の俳句の先生から「どうか社会に出たら、近くにある句会に必ず入会してください。そこで私が塀の中で教えたことを、今度は次の人に伝えてください」という助言を得ていたからだ。

先生は俳句愛好者の裾野を広げたい考えだったようだが、俳句に目覚めた私の荒削りな作品を、それなりに買ってくれていたのだと思う。俳句普及のメッセンジャー役を担うには、当時の私は荷が重かった。でも、私はこの役割は、回復の道を歩む依存症者が

社会の中で苦しむ未知の依存症者にメッセージを届けて、回復への希望をリレーしていくダルクの教えと同じように思えた。

前回触れたように、新たに出会った神栖俳句会の佃田道雄会長はとても信頼できる人で好印象を得ていたので、「今度は、この先生について学んでいこう」と素直に思った。会員は20人ほどだったが、皆さんよくしてくれた。とりわけ役所勤めをしていた方は作品はもちろん、実生活での私の変わりようを喜んでくれて、励まされた。当時、一入寮者だった私には時間があり、句会に参加して腕を磨くことができた。しばらくすると、私は神栖市広報誌の「かすみ俳壇」常連の入選者となった。(次号につづく)



トム

## 卒業の人波やがてセピア色

卒業式が終わり体育館などから人が校庭へ出てくると校庭もセピア色に染まる実感の景です。セピア色は茶褐色で昔の白黒写真が年月が経つと茶色に変色したので懐かしい思いを込めてこの名がある。卒業は思い出と次ぎの夢の出発の日でもある。



ユバ

## 卒業や交わす握手の力瘤

卒業には各種学校の他にも修行的なものがあるが、何れにしても合格して共に喜びを分かち次ぎへ巣立つ日は感慨深い、握手の力瘤に男の友情が見えて清々しく又の会う日と健闘を誓う句でもあります。

## 今月の秀逸句

オノ

卒業の心にしみる  
別れ歌

秀逸句

卒業式の最後には、仰げば尊し、蛍の光、などを歌う、中学高校の頃は清純でやはり胸にしみる、それが青春の証でもある。誰にも懐かしい句です。

アベ

鉛筆の下書きのまま  
卒業文

秀逸句

学校では卒業前に希望や感想を書かせて文集にする、その下書きを清書するつもりが締切りが迫りそのまま出す、誤字脱字、直したい文もある、しかしそれが今の本当の自分なのか。感傷の籠る句です。

カイジ

ゆめ夢の白線流し  
卒業す

秀逸句

原句は白線流しのことと思えば変えなかった。白線流しは岐阜県斐太高校の七十年前からの行事、男は学帽の白線女子はスカートを繋ぎ卒業式の後大八賀川に流す。過ぎし夢未来の夢と絆を意味する。これは思い出の句かも。

シマ

卒業の釦が欲しい  
片思ひ

秀逸句

制服の釦を人に与えるのは戦中のごとで映画化されて広まったとも。第一釦は自分、第二釦は妻や恋人へ、胸の近くの釦なので心を意味する。この「詠は女性側からの句で微笑ましくも切ない。」

## 佳作

## 受刑者の句

北海道 章三郎

淡雪に消してしまいき  
過去のあり

淡雪は春先に降る雪で、綿雪、牡丹雪、たびら雪などとも云い消えやすい。人には残したい思いと消したい思いがあるが、この詠は雪の様に消したい切実な句。

北海道 章三郎

五七五のほか身寄りなき我  
老の春

五七五は俳句のこと、それ以外に身寄りがないと云うのは寂しい、テレビでも孤独死の報道があるが人は極まるどころ誰かと供に暮らすのが幸せと思う。私も俳句の一端に遊ぶ一人で句の作者へも声援を送りたい。

卒業の節目や心改める カツミ

卒業の思い出しける尾崎かな キコ

春かすみ遠く眺める我が生も ミヤ

ひな祭り我が子思いし一日かな イルカ

新たなる思い抱きて卒業す レイコ

顧みておぼろげなりぬ卒業式 ユタカ

ひなまつり一人息子がやりたがり シマ

# どっこい私も生きてます～我が回復記～ 「アディクトのトムです」 No.2

## ままならない高校、大学時代を振り返る

ど～も、(回復してない)トムの回復物語です。えーと、先日、潮騒の就労支援講座の講師を務めて頂いた山谷グループの遠藤さんにも「トム、回復してねえ。」と言われ、身に染みております。今、何回目かの素面(しらふ)の「底つき」しております。自分の金銭管理の甘さがアディクション(=依存症)の再発を招きかけました。その場面ではとても孤独で、逃げ出したいと思いました。自分の力では何とも、この病気の誘惑には勝てそうもありません。白旗を揚げました。死んじゃうと心底思いました。やめるためなら何でもすると誓いました(神様に)。後はハイパーパワーに全てをお任せ。自助努力も忘れないようにしています。鋭意努力中…。(^\_^;)

さてさて、前回の続きです。コンプレックスの塊だった高校時代、自分の成績は最初の頃は中くらいでしたが、徐々に後ろから数えた方が早くなってきました。特に数学は微分・積分あたりで完璧にアウトでした。「努力しなさい」と担任教師にも言われましたが、形だけ取り繕っていたので、なかなか結果が出ない状況でした。どうしたらいいかわからない感じでした。そのことを書き連ねると今でも気恥ずかしくなりますが、ゆがんだプライドが自分の実像を見通せなくしていたようです。こうした傾向に、どうやら頑固な自分がほのかに見えるように思います。

そんな中で大学受験の時期を迎えます。当時「ヤリタイ」だけの自分は、好きだった彼女の尻を追っかけて音大を目指し、両親に願い出て多額のレッスンにも行かせてもらいました。もともと自分は八重歯で、その矯正をしなければいけなかったのに、そちらは手をつけず楽しいことだけやっていました。結果、音大は見事に落ちました。そこで大きく方向転換して、一般大学を目指すことになりました。でも、高校で努力してなかった分、もう大変でした。ここでも形から入り、予備校も通ったけれど、なんだか自分だけが蚊帳の外みたいな感覚で居心地の悪さを感じていました。この辺りが最近流行の発達障害なのでしょうか？ 物事を覚えるのにとっても時間がかかります。

それでも三浪してやっとのことで明治大学に入りました。ほんとにもう駄目だと感じた時に、神様は一つだけ残してくれました。苦勞して入った明大でしたが、時あたかも世間はバブルに沸き立ち、僕もすっかり時代の狂乱にのみ込まれて浮かれたまま大学生活を過ごしました。大学では彼女は出来なかったけれど、遊びは一通り覚えしました。あの破滅的な生活感覚は、もう本当に過去のものとしないと身の破滅だと今は考えています。ただ一つ、大学での収穫は今潮騒JTCが直面している終末医療に関してのゼミを選んだことです。そこだけは数少ない「優」の成績をもらいました。でも困ったことに、この時から借金癖が始まりました。ここまで書いて、な～んか、ほんとに変わらない自分がそこにいて頭が痛いです。で、これから先は次回に。

## 3月のバースデイ

<p><b>たつや</b></p>  <p>今年こそはいい歳にしたい</p>	<p><b>こたろう</b></p>  <p>うれしい</p>	<p><b>ヒロ</b></p>  <p>日々に感謝します</p>	<p><b>リューマ</b></p>  <p>クリーン6ヶ月が山場だったけど、6ヶ月過ぎました。みなさんのおかげです</p>
<p><b>シュウ</b></p>  <p>ありがとう</p>	<p><b>カズ</b></p>  <p>48歳、年男です。がんばります</p>	<p><b>ジサマ</b></p>  <p>66歳になりました。足がよくなりますように</p>	<p><b>ケン</b></p>  <p>65歳の誕生日になりました</p>

## 3月の行事予定

- 19日 潮騒農業視察&パパイヤ料理試食会
- 22日 北関東エリア オープンステップセミナー
- 23日 潮騒家族会
- 24日 入寮者3月誕生会
- 25日 筑波山ハイキング登山
- 27日 映画会
- 30日 潮騒アディクションセミナー

## 4月の行事予定

- 3日 潮騒俳句会
- 6～8日 シニア温泉旅行(福島)
- 13・19日 秋元病院メッセージ
- 13～16日 べてるの家見学研修(農業隊)
- 17日 水戸老人ホームエイサー太鼓演奏
- 20日 潮騒入寮者花見会イベント

## 献金を頂いた方 (3月15日現在)

・渡辺 洋子様 ・内堀 高良様

## 編集後記

先月号から栗原豊施設長の肩書きを「センター長」に改めています。施設長という職名は行政用語の色合いが強く、手垢にまみれすぎていると考えたのと、潮騒JTCに新たな依存症の回復・就労支援共同体(アディクションビレッジ構想)のイメージを賦活したいとの意味合いを込め、センター長としました。ご理解ください。その栗原センター長が2ページで述べている「自然」あるいは「反自然」についてですが、大別して2つの考え方があるように思います。本来、人間も自然の一部なのに機械化などで自然にどんどん手を加えていくというのは「反自然」な生き方だとする考え方。もう一方は、人間がこの地球上で生きていくためには機械化によって自然に手を加えることは仕方のないこと。そのこともまた大きな意味では「自然」なことだ、という考え方です。なにやら禅問答のようですが、ダルクや潮騒の立場は後者のような気がします。あまり難しく考えずに、とにかく適度な加減で生きられることが大事です。皆様はどうお考えでしょうか。(市)

## 献品を頂いた方 (3月15日現在)

・堀内 誠様 ・高山 様

その他匿名の皆様からも献品・献金をいただきました。ありがとうございました。

今月も献金・献品をいただきました。心から感謝申し上げます。

本当にありがとうございました。

おかげさまで潮騒JTCは、回復のためのプログラムを  
実践することができておりますことをご報告いたします。

今後ともご支援くださいますよう、なにとぞ宜しくお願い申し上げます。

※発送作業簡略化のため、振込取扱票は全員の方に同封させていただいております。どうぞご理解のほどをお願いします。

## 潮騒通信 どっこい生きてます! 2014年3月号

### Contents

- P② 潮騒JTCは「ほどほどでやれる農業」を目指します
- P③ 念願だった日本財団の福祉車両が納車
- P④ 就労支援実践講座 「3億円の倒産を乗り越え希望のメッセージ」
- P⑤ 「自力で建設会社を設立し山谷のアル中仲間を応援」
- P⑥ 女性メンバー「真壁のひなまつり&益子焼」日帰りツアー
- P⑧ 今月のイベント参加報告  
とかちダルク1周年記念フォーラムに参加  
平成25年度依存症回復施設職員研修を受講して  
岐阜ダルク女性ハウス1周年記念フォーラムに参加して  
映画プログラムに参加して
- P⑩ 啓発リーフレットを制作・発行  
鹿島灘太鼓の練習が始まりました
- P⑪ 受刑者からの手紙
- P⑫ しおさい俳壇 3月「卒業」
- P⑭ どっこい私も生きてます! ～我が回復記～



### 編集・発行:

特定非営利活動法人  
潮騒ジョブトレーニングセンター(本部)  
〒314-8799 鹿島郵便局 私書箱34号  
〒314-0006 茨城県鹿嶋市宮津台210-10  
TEL:0299-77-9099 FAX:0299-77-9091  
潮騒リカバリーホーム(中施設)  
〒314-8799 鹿島郵便局 私書箱56号  
〒311-2213 茨城県鹿嶋市中2773-16  
TEL:0299-69-9099 FAX:0299-69-9098  
潮騒スリークオーターハウス鉦田  
〒311-2113 茨城県鉦田市上幡木1113-39

E-メール [k.s-darc@orange.plala.or.jp](mailto:k.s-darc@orange.plala.or.jp)

ホームページ <http://shiosaidarc.com/>



